

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.3

昨年の夏休み休暇は、「やまめ・いわなキャンプ」のために日程を調整し、遠く福岡より、間に合うように来て間に合うように帰った、通称「まーしー」の横山昌佳くん。東京学芸大学卒の 26 歳、独身。現在は浦和に住んでいます。横山くんからのメッセージです。

『雨キャンプの思い出～むらまつりキャンプより』

「土砂降りのキャンプは思い出に残るんだよ」、と佐々木のおっちゃんの言った通りに、今回のキャンプは印象深いものになった。雨。雨。また雨。雷が鳴って雹が降って、川はごうごう、お祭りの会場はどろどろ。開始は4日から延びてしまい、薪は燃えない、靴はびしょ濡れ、良いことといえばブヨが出ないことくらいだ。そんな今回の「むらまつりキャンプ」、ぼくは風馬の無謀な誘い——黒ちゃんとはるちゃんにずいぶん心配をかけてしまった——を受けて、通行止めの交通事情を確認せずに出発。結果オーライの形で何とか前日入りを果たした。

おっちゃんの作った里芋を食べ、ビールを飲み、寝袋を引っ張り出してその夜はすばやく寝た。翌日も、やっぱり雨。葵ちゃんと道具箱を整理するうちにみんなが到着し、テントは後回しでお祭り会場へ。会場は前述の通りどろどろのびちゃびちゃ。足元ばかり気になったけれど、クリーム・チーズがみそ「福生ドッグ」を食べ、ビールを飲み、すっかり大人びたさくらに挨拶をしてキャンプ場に帰った。日向はさんざん迷った末に「からポテ」と「鯛焼き」を食べ、進路は HONDA のブースでせっせと自動車の模型を作っていた。

ぼくが福岡にいるうちに、スタッフもずいぶん知らない顔が増えたけれど、あまり積極的に声はかけない。今回のキャンプは新しい役割を担いたいと思っていたから、大学生とは適当にお付き合いして、子供たちも任せ、あとはこれまでしたことのないことをしようと思った。それで、薪割りをした。ぼくは下手もいいところのド下手くそなので、恥ずかしいからあんまりやらないのだけれど、でももう一度ちゃんと教わってやってみたのだ。「速さが大事なんだよ」と例の水戸訛りでおっちゃんが説明する。「でもあんまり速いとコントロールが悪くなるから……」ぼくは素直にしたがって鉞を持ち、「左ひじを引く！」パコンと割った。

その成果が出たかどうかはともかく、薪割りをやるとやっぱり子供たちが寄ってくるので、おっちゃんの受け売りをそのまま教え伝える。繰りてと健介は「周りチェック！」「足を広げる！」と楽しげにやるのでこちらもじつに楽しい。ことに健介は楽しかったようで、ご家族が遠巻きに見守る中で一生懸命取り組んでいた。

雨だと東屋が賑やかだ。「これが基本形です」、とおっちゃんが例のなぞなぞをやりだした傍で、ちよいちよい、と風馬を呼んで背もたれにし、対岸の新緑を眺めつつビールを飲む。キャンプ

場ではいくらでもビールが入るのだ。そのうちにうまいカレーが出てきて食べ、ビールを飲み、お松焼きへと向かった。今年の花火は昨年できなかった分もあってか、BGMも流れてずいぶん凝っていた。福島の花火が胸にしみた。

キャンプ場へと帰る道々、葵ちゃんが「あと何メートル？」とぼくに尋ねるので、「あと 550 メートルだよ」と答える。その適当さ加減がおもしろかったのか、葵ちゃんはそのあと何度も同じことをたずね、ぼくも同じように返した。雨は止んだが星は見えない。ふと、昔この道を大地と大ちゃん和歩いて、途中でアスファルトに寝転んだことなどを思い出す。思い出に残るのは花火だけじゃないんだ。

「あと何メートル？」…「340 メートルだよ」

「あと何メートル？」…「ほら、ここが 250 メートルのライン」

「あと何メートル？」…「180 メートルになった」

「……………」…「……………」

夜はやっぱりビール片手に、囲炉裏端で、あるいはベンチに輪になって、思い思いに語り過ごす。やぎ(小柳由香:現在小学校教諭)の壮絶な恋愛譚はいつしかただのノロケになったので解散し、大ちゃんと、甲斐と火を囲んで遅くまで話した。周りに転がっているのはアザラシではなく、寝袋に入ったあやちゃんやまつた。深夜に対岸の森からピィ！ ピュイ！ と鳴く鹿の声を聴いて、昔、ヘリポートへ向かう自動車を見た、金色に光る二つの眼を思い出した。

翌朝は当然のように寝過ごす。雫さんがうまいコーヒーを淹れてくれて、薪割りをしつつ、きれいに晴れた山々を眺める。白糸の滝に行けば「白糸」どころではなく水量が豊かで、岩場に仁王立ちした甲斐は背中をびしょより水しぶきで濡らした。そのあとみんなで休み休み坂を歩いて下り、杉林に差し木漏れ日や、幼木の葉、山桜のピンクに眼を吸われつつ、心穏やかにキャンプ場へ帰った。

帰りたくないな、と思ったので、帰りたくない、と正直に伝える。それで夕方から七輪で餅を焼いて、ビールのみ、オーナーのヨシさんに日本酒を勧めて、酔って、寝て、眼が覚めて朝 6 時、熾き火で火を起し、湯を沸かし、鳥が鳴いて、佐々木のおっちゃんも起きてきて、コーヒーをのみ、ああ、と息つき、ふと見れば、柱に立てかけられた黒板に子どもの字で、雲囲みの次の言葉が書かれていた。ぼくの今の気持ちそのものだった。

なつのキャンプたのしみ！！